

『日本で最初の喫茶店「ブラジル移民の父」がはじめたーカフェーパウリスタ物語』

長谷川泰三著

食料・環境領域 上席主任研究官 清水 純一



皆さんは「銀ブラ」の語源を「銀座をぶらぶら」することだと思っていませんか。実は評者もそう思っていました。ところが、本書によれば「銀ブラ」を造語したのは大正初期の慶應の学生であり、授業を終えたあと銀座へ出て、カフェーパウリスタという喫茶店でブラジル珈琲を飲むことから来ているのだそうです。つまり、「銀ブラ」は「銀座+ブラジル」の略だというわけです。

1911年に第1号店が開業したカフェーパウリスタはそれ以前の喫茶店が高級店だったのに対し、安価な料金で大衆のみならず多くの知識人の人気を集め、日本初の珈琲喫茶と呼ばれています。本書には明治末期に設立され、現在も銀座8丁目に店を構えているカフェーパウリスタとこの店に出入りした人々の様子が当時の風俗を絡めてつづられています。特に、常連であった各分野の著名人の逸話は誠に面白くて読んでいて退屈せず、新橋の飲み屋で話したくなるエピソードが満載です。

ただし、それだけならここで取り上げるまでの必然性も無いのですが、注目すべきは、創立者が「ブラジル移民の父」と言われた水野龍^{りゅう}であることです。評者はブラジル農業を専門としているので水野の名前はもちろん聞いておりますし、カフェーパウリスタも店名がポルトガル語（「サンパウロ州の珈琲」という意味）なので、以前から気になる存在でした。しかし、本書を読むまでブラジル移民と銀座の喫茶店が水野を通してつながっているとは恥ずかしながら知りませんでした。

土佐出身の水野は1904年に皇国植民合資会社を設立し、1907年にブラジルのサンパウロ州と日本移民輸送契約を結び、1908年には笠戸丸で我が国初のブラジル移民を送り出しました。笠戸丸移民は事業としては赤字で植民会社は倒産し、会社を売り渡した水野は実務者として以後の移民を取り仕切るようになります。この時、水野の窮状を見たサンパウロ州政府は珈琲豆の無償提供を申し出ます。その量たる

や膨大なもので1911年から1923年まで、年当りそれ以前の日本の輸入量の8割に相当する豆が無償で輸入されて

います。この豆を売りさばくため、水野は1910年カフェーパウリスタを設立します。豆の原価がただなので他の喫茶店よりも安く珈琲を出せたのは当然でしょう。おかげで店は隆盛を極め、全盛期には全国の店舗数は20店以上、従業員数は2,000人を越えるまでになりました。

ただし、この本の性格上詳しくは触れられていませんが、植民会社の楽観的な宣伝を信じてブラジルに渡った笠戸丸移民は艱難辛苦をなめ、最初の入植地における1年後の残留率はわずか18%にすぎません。ブラジル側が日本人移民を必要としていた背景には、1888年に奴隷制が廃止されたことによる労働力不足がありました。実際、移民の中には奴隷のような扱いを受けた場合もあったようです。このような移民の苦勞の見返りに無償提供された豆で日本で珈琲文化が花開いたとしたら複雑な気持ちになります。

本の紹介に戻りますと、戦前のカフェーと言えば「女給」さんを連想するのは評者だけではないと思います。その点、カフェーパウリスタがユニークなのは、15歳未満の美少年給仕を雇って人気を博していたということです。ジャニーズ事務所もびっくりで、そのマーケティングには驚かされます。

またもうひとつ時代の先を行っていたのは、銀座店に男子禁制^{レディスルーム}の婦人室を作ったことです。この部屋には平塚らいてう等が結成した青鞥社を中心とした当時の女性解放運動をリードする女性達が集まって珈琲を飲みながら年下の男性との恋愛を語っていたようです。現在でも銀座店にブルーのストッキングを履いていって店員に言うと珈琲代が無料になるとこの本には書いてあります。女性の方は一度試されたいかがでしょうか。